



宮坂静生薦 岳 3 月

初	反	黒	多	喜	大	極	人	大	人	人	反
空	戦	土	喜	月	寒	月	日	寒	寒	寒	戦
や	を	に	二	の	や	の	や	や	や	や	を
一	訴	ま	忌	大	な	め	ス	漬	物	物	訴
番	ヘ	み	や	な	め	く	ノ	物	石	石	ヘ
星	ユ	れ	ス	め	く	ぢ	一	の	の	の	ユ
は	リ	泥	ノ	だ	ぢ	ら	忌	の	の	の	リ
中	ノ	鰐	ー	ん	ら	粘	や	大	の	の	ノ
村	キ	と	ボ	め	く	つ	人	寒	な	な	キ
哲	ミ	ヤ	ール	く	ぢ	こ	日	や	め	め	ミ

初護摩の炎は蝶を放つごと
起舟祭鬪ひを知る背骨かな
北嵐荒武者のごと樅一樹
温暖化眠らぬ熊に麻酔銃
上崩雪や日はひくひくと雲の奥
地吹雪や足あることを忘れをり
宙背負ふ鷺巨きや冬至晴
燭酒や怒濤に星の粒揃ひ
冬のダチユラ倭寇の船を呼ぶが如
夢を見て布団の瘦せてしまひけり
こころして行けど枯野へ嵌まりたる
寒鯉のなほ沈みゆく深さかな
極月や心はどこかかかりうど
にこやかに征きし花嫁枯野星

吉沢さよ子
佐久間梨江
小林春代
吉澤利枝
西牧千恵子
名取朋子
小山咲子
上條静子
樋口玲子
廣枝千鶴子
木村さとみ
住育乃
三品良子
珠凧紀波
角田良子

窪山志古 加瀬吉田野長遠田清渡有矢島
田田摩屋 ひろ川村口島藤中水辺手島
英一晴 教道美智靖純逍真
治政樹洸 し子子子環子子子徑帆勉惠

岳の源泉 三月

(487)

宮坂 静生

— 同人集・岳集・青雲集から

はじめに。ことしは春から慶事が続く。小林貴子さんが第八回星野立子賞を受賞。NHK全国俳句大会では柿谷有史君が「雀には雀の丈や秋の空」の佳句により大会大賞を受賞した。日頃のたゆまない研鑽が実を結んだものと、讃えたい。

初護摩の炎を蝶放つと見た—比喩の効果

初護摩の炎は蝶を放つごと 矢島 恵

当初、比喩「蝶を放つ」は弱いと感じた。が、燃え盛る炎のさまを蝶と見ることで、そんな火の蝶が存在してもいい気分になる。比喩は対象を大げさに表現するばかりではなく、一見、弱弱しいものから鋼のような強さを引き出す働きがあることに気付かせてくれる。美しいものへの信仰のようだ。

起舟祭鬪ひを知る背骨かな 有手 勉

能登の正月十一日の起舟祭詠。船靈祭ともいう。今年の船乗り始めの儀式であるが、威勢がいい。古来朝鮮半島との生存を賭けた男たちの闘いの歴史を秘めた伝承が生きているのである。「背骨」が句の底力、ポイントである。

温暖化眠らぬ熊に麻醉銃 清水 道径

動物園の光景だろうか。温暖化現象もここまで進行したものか。麻醉銃を撃ち熊を麻酔させ眠らせるとは。地球を不自

のまを蝶と見ることで、そんな火の蝶が存在してもいい気分になる。比喩は対象を大げさに表現するばかりではなく、一見、弱弱しいものから鋼のような強さを引き出す働きがあることに気付かせてくれる。美しいものへの信仰のようだ。

能登の正月十一日の起舟祭詠。船靈祭ともいう。今年の船

乗り始めの儀式であるが、威勢がいい。古来朝鮮半島との生存を賭けた男たちの闘いの歴史を秘めた伝承が生きているのである。「背骨」が句の底力、ポイントである。

冬のダチユラ倭寇の船を呼ぶが如 田村 道子

沖縄詠か。倭寇は日本の中世に朝鮮半島を脅かした海賊船。「呼ぶ」とのいい方から、被害を受ける側の発想ではない。すると、さしあたり倭寇の船団を結成し、中国大陸や朝鮮半島を襲う準備にかかるあたり、沖縄、奄美大島辺のダチユラ（朝鮮朝顔）を想起する。悪巧みの句。想像力豊かな海賊詠。

夢を見て布団の瘦せてしまひけり 吉川 教子

布団に夜の夢が藏されていた。朝になってよれよれの布団を見ての着想である。普段気付かない俳味がある。

こころして行けど枯野へ嵌まりたる 加瀬ひろし

今月の秀句

北風荒武者のごと樅一樹 渡辺 真帆

北の高みから吹き降ろす風に立ちはだかる一本の樅の大木。「荒武者」の比喩が勇壮だ。寒風に揉まれる樅がさながら戦記ものの弁慶のことし。整った松や女形の杉では荒れ狂う凄みが出ない。ここは常緑樹の樅でなければ貫禄が出ない。信念に生きる、芯の強い作者を思わせる。

然にしたのは人間の仕業であり、自然界への人間の悪智恵のやり過ぎはいつか破綻しないだろうか。

上崩雪や日はひくひくと雲の奥 田中 純子

「うわぼう」と呼ぶ。古い雪の上に新雪が積もり雪崩れるのである。神経質な日のさまを「ひくひく」と、皮膚病にでも罹ったような表現が面白い。臨場感がある。情感ある作者。自然の引きつけ方が巧い。

地吹雪や足あることを忘れをり 遠藤 靖子

地面から吹き起る雪に一瞬、身が浮いた感じ。雪女ではないが、足の存在を忘れたという。雪国秋田の地吹雪の地の力を捉えたもの。秋田から津軽にかけて、東北でも特有な地貌がある。菅江真澄を惹きつけた地貌である。

宙背負ふ鷺巨きや冬至晴 長島 環

目の前にした「のすり」（鷺）の旋回。折から昼が短い冬至の晴天だけに、自然界の大きさを不思議に感じたのである。人間の季節感は、例えば昼が長い夏至ののんびりさ加減と、冬至に抱く切迫感は違う。具象化がいい。人間は自然界に逆らえない。

燐酒や怒濤に星の粒削ひ 野口美智子

枯野へ入り心が暗くなる。気分を上向きにと、こころして行くが、冬はとかく鬱鬱して駄目だという老齢の気持か。他に雪嶺集・前山集から推薦候補作を掲げる。

枯寒の晴や殊に信濃の雲迅 古畑 恒雄
手のひらは器のはじめ竜の玉 中里 結
元枯寒の朝や古墳の主の声聞かむ 清水美智子
この星を生涯に出でず煮玉に大根酒かけむ 樋上 照男
除夜の鐘聞きてゴッホの耳のこと 北野 芳夫
にこやかに征きし花嫁枯野星 竹岡みち子
にこやかに征きし花嫁枯野星 山田 一政

「かかりうど」は頼るばかりの人。歳晩、年用意など、男はおろおろするばかり。お任せと、寄りかかって過ごす。十二月はそんな月だとは、古来日本の男の心情であろう。古語を用いて極月の色合いを滲ませたところが、地味ながら巧みな句。

満蒙開拓団に嫁した女性の行く末を思うと胸が詰まる。秋田も、長野県、山形県、熊本県などと並んで戦争末期に大陸へ多くの開拓団を送り、花嫁も甘言のもとに、半ばお国のた

めと言ひ聞かせ出征させた。故郷離れて幾千里、仰ぐ枯野星が切ない。一政歴史シリーズの作。前書がなくとも理解できるが良い。特殊な句材はどこまで理解されるかが課題だ。

真夜中の美術館より春の声　窪田　英治

不思議な句である。真夜中の美術館の絵画があげる「春の声」。嬌声とも昼間の芽吹きの声とも違う。声とはいえ、聴覚ばかりではなく、どこか視覚からの幻想のようだ。ようやく句に幅が出て、いよいよ作者の本領發揮か。調子がいい。

初空や一番星は中村哲　吉沢さよ子

正真正銘の悼句。今年初めての空に輝く一番星、中村哲さんへ。

今月の秀句

寒鯉のなほ沈みゆく深さかな　古屋　洸

寒鯉の描写に作者の気持がしっかりと付いているのがよい。寒鯉は深みへ沈む。さらに底を探るという着想に詩想がある。従来のことばへのぎこちなさが、ここへきてよく熟れてきた感じだ。一方でだけでなく、句作に余裕が出てきたものか。作者は関東支部を中心とした吟行会の世話役を長くやり、歩くことで着想を得る経験が身に付いて来ている。「寒冷えに泥鰌のやうに眠くなる」も地に足の付いた面白い発想である。

大寒や漬物石の無愛想　上條　静子
「無愛想」に注目した。もう不要になつて来た漬物石。ぶすっとして漬物樽から降ろされる時期が近い。

人日や斯くして空に放つもの　樋口　玲子

一月七日、七草は人の日。やつとせいいした感じ。その氣分を「空に放つもの」といったのである。囚われない言い方ができりよくなつた。初々しさがある。

侘助や人の名塙堀より出でず　広枝千鶴子

陶芸家の作者。「塙堀」がいい。さすがに人名の出がわるい。こんなことはなかつたがと思ひながら。侘助がお洒落。

時代なり布団温む乾燥機住育乃

夜温かい布団にと、乾燥機で湿りをとり、温める。時代が変わればかわるものとの感慨を句に。こんなことが俳句の句

今月の秀句

逝く人のしがらみ解けぬまま雲　角田　良子

切ない句である。この世からのしがらみを抱えたまま、あの世へいかざるを得ない。そんなことがあるうか。亡くなるぎりぎりまで、ごたごたが続いた。外も雪や雨が混じったごちやごちや。時にあきらめも知恵であるが、それも放棄とは凄い。小諸には執念の俳人が育つ風土があるものか。

夙や君想ふことヤメテミル　佐久間梨江
思いこがれて、苦しい。夙の夜は逢いたい、逢いたい。息を止めた。その状態が「ヤメテミル」。ますます駄目という句。どうしよう。相談されても困る。勝手にすればと、突き放すだけ。

反戦を訴へユリノキの裸　小林　春代

大胆な発想に感心した。チューリップツリー。すつきりしたゆりの木の裸木。それが葉を落とし裸になることで反戦を表示しているという。ジョンレノン・小野ヨーコのようだ。

黒土にまみれ泥鰌と男かな　吉澤　利枝

「くろぼこ」は茨城方言か。私の中の男とはこうだという。綺麗ごとを並べるのが男ではない。幾分古風なのが粋か。

多喜二忌やスノーポールの乱反射　西牧千恵子

多喜二忌は二月二十日。雪の上に出た雪竿か。日が強くなり、乱反射している。そこに波瀾に富んだ小林多喜二の生き方を重ねたもの。社会詠、生活詠を本領とする作者。

読み書きを忘れ大根ばかり焼き　名取　朋子

大根にかかる名句は多い。掲句もひたすらな生活を大根で暗示。知的な好奇心旺盛な作者でなければ作らない作。

極月の大なめくぢら粘つこき　小山　咲子

暖冬で、十二月になつても厨に大きな蝋燭が元氣。越冬準備なのか、粘っこいという。見るべきものを見ている。

材に。高山の住斗南子門下。寸暇を惜しんで意欲がある。

ペンギンは水潜りをり八日吹　木村さとみ

陰曆十二月八日に吹く雪混じりの強い風。山陰などの地貌季語。浜には竜宮を追放された「はりせんぼん」(河豚)が揚がるという。針千本の日。江戸期『日次紀事』に出る。ペンギンは現代風、ちゃっかりもの。水族館風景か。

他に岳集から推薦候補作を掲げる。

新刊書の如き匂ひやもつてのほか　畦上　文子
海を眞白に碎く鯨の尾　伊藤　和子

小女子のごとき鬪魂冬木の芽　功刀たかね

初曆目を閉ぢてゐる数字たち　珠嵐　夕波

まだ始まらないカレンダーの月日を示す数字はおやすみ中。目を閉じている。気が付かない卑近なものへの着眼が鋭い。さすがに二十代の斬新な空気が句にある。井波の新進への期待が大きい。みんな意欲的なグループメンバーだけに、刺激し合い、自分の見方を高めることができよう。

青息吐息白息は生の証　三品　史紀

きびしい句だ。北海道の冬、清冽そのもの。生きる最前线に立つ。ものを創るとはいつもこの決意が必要であろう。三十代はみな意欲の天才だ。自然科学は閃き、人文科学は持続した粘り腰。各方向へのアンテナは感度がいいことが大事。

○気になる表現

評判になつた句の大事なポイントを用いるのはダメ。

例句 年用意注ぐ仕種して急須買ふ

かつて、季語は違うが、「飲む仕種して茶碗買ふ」というフレーズを詠んだ句を推薦した記憶がある。目のつけどころを勉強するには先人の作品を読んで着想を学ぶのであるが、掲句は初心者が真似をして俳句表現に慣れる練習をすることとは違う。作り手が一番苦労して着想したポイントをそっくり自分の句に取り入れるのはいけない。似た表現はあり得ても、さわりのところをそのまま取り入れるのはダメ。

当然連想されることを強調して表現しても詩情がない。

例句 石蕗の花黄色際立つ狭庭かな

石蕗の花は黄色。これは大方の人が石蕗と言えば連想することである。「黄色際立つ」をいくら強調しても新しさがない。ささやかでも自分が見つけた発見がほしい。

霧囲気を決まり切つた言葉で言わない。描写が大事。

例句 日溜りに風韻釀す冬木の芽

「風韻釀す」は、「良い気分を感じてちょうどいい」と、読み手に任すやり方。何も描写がない。これでは表現したことにはならない。自分の言葉で、日溜りにある冬木の芽から感じたことを表現しないといけない。霧囲気を抽象的に言わないこと。

よく間違える。「元旦」と「元日」は違う。

例句 元旦のさいころ遊び幼らと

「元旦」は一月一日の朝。その日一日は「元日」。この句は「元日」がふさわしいであろう。

○このように推敲し添削する

言い方をくぶうする

原句 冬至南瓜据れる上がり框かな

川村 五子

受身なのか、「据れる」が気になる。自然な言い方で。

添削 冬至南瓜据ゑたる上がり框かな

佐藤 雅代

冗漫ではないか。三日月を「冬月」にして句末を変える。

添削 ピルよりも低き冬月六本木

川村 五子

原句 クリスマスツリー様様東京駅 住 育乃

佐藤 雅代

「様様」は平凡。ここは簡単に主觀を入れる。例えば、

添削 クリスマスツリーの小さし東京駅

川村 五子

文法は正しく

原句 子等の声聞えぬ公園淋しけり 滝田 程子

川村 五子

「淋しけり」という形容詞の接続はない。「淋し」という語幹に「けり」は続かない。「淋しかり」とする。「淋しかりけり」が本来であるが、俳句で五音に收めるため「淋しかり」も現在は通用している。

「やーかな」「やーけり」と、一句に切字を連用しない。

原句 寒月や杉の葉先の雪かな

川村 五子

原句 曙や冬晴の香の有りにけり

川村 五子